●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成23年 西雲寺だより　立春号（20号）

前坊守十三回忌 法要のご案内

平成二十三年
四月二十四日
（日曜日）
午前十時より

法話
野世信水師

おときをご用意いたします

みなさま
お誘い合わせて
お参り下さい

「一宗の繁盛」は一人の念仏者が誕生することだといわれます。これは念仏の教えはどれほど聴聞しても、邪見驕慢のこころではいただけないものであることを教えています。

親鸞聖人は「愚禿」（愚かもの）と名告り、二十九歳のとき、法然上人より賜わった「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の一言を、九十歳でご往生されるまで、牛が干草を反芻するように繰り返しいただいていかれたのです。お念仏申すときに、我身の愚かさに気づき、如来の大悲に生かされるのです。お念仏を忘れたとき、私たちは自我中心の邪見驕慢になり、自分を見失うのです。

聖人の七百五十回御遠忌もあと三ヶ月足らずとなりました。一人の念仏者の誕生を願い続けていて下さる聖人に、慚愧のこころでお会いしにいくのです。

（住職）

親鸞聖人のご生涯

関東の親鸞

火宅無常

親鸞聖人は世の中の姿を「火宅無常（かたくむじょう）」としか述べておられませんが、聖人の関東時代には史上に残る大事件が続発しています。

鎌倉時代においては頼朝の死後、主導権をめぐる激しい争いが続き、頼朝の妻政子の父北条時政が幕府の実権をにぎって執権政治を行ない権勢をふるうようになりました。一方、京都の朝廷では、念仏を禁止し、四人を死罪、法然上人、親鸞聖人はじめ八人を流罪の刑に処し、承元（じょうげん）の法難をひき起した後鳥羽上皇が院政をひき、軍事力の増強をはかるなど、幕府と対決して朝廷の勢力を挽回しようとしていました。承久元年、将軍実朝が暗殺されたのをきっかけとして朝幕関係は不安定となり、上皇はついに義時追討の兵をあげました。しかし上皇側の期待に反して、東国の武士の大多数は北条氏のもとに結集して、戦いは幕府の勝利に終りました。後鳥羽、土御門（つちみかど）、順徳の三上皇は遠流となり、後鳥羽上皇は隠岐島（おきのしま）に流されたのでした。四十七歳の聖人は、関東の地でこの知らせを聞き、世の火宅無常の姿をしみじみと感じられたことと思われます。

嘉禄の法難

前述したように、親鸞聖人が法然上人とともに流罪を許された翌年、建暦二年一月二十五日、法然上人は齢八十で命終すると、ほどなく隆寛律師（りゅうかんりっし）が中心となって法然上人の『選択集（せんじゃくしゅう）』が刊行されます。すると直ちに華厳宗の学僧明恵（みょうえ）上人が『選択集』の徹底した批判書である『摧邪輪（ざいじゃりん）』を公にしました。以後『選択集』と『摧邪輪』をめぐって、弁護と批判が激しさを増すなかで、比叡山は専修（せんじゅ）念仏の禁止を改めて朝廷に奏請（そうじょう）しました。元仁（げんにん）元年、聖人五十二歳の時です。これが発端となって再び専修念仏に対する大弾圧が行なわれたのです。これが嘉禄（かろく）三年、聖人五十五歳の時に実行された「嘉禄の法難」です。『選択集』の版木が朝廷によって没収されて比叡山に送られ、僧兵たちは「三世（さんぜ・過去現在未来のこと）の仏恩に報ぜんがため」と称して、大講堂の前庭でそれを焼き払ってしまったのです。さらに法然上人の墓をあばいて遺体を加茂川に流そうとしたのです。すでに僧兵の手によって上人の墓は掘り起こされはじめたのですが、上人に帰依する宇都宮蓮生（れんしょう）をはじめとする武士たちが抜刀してこれを阻止したと伝えられています。事態を憂慮した遺弟（ゆいてい）たちは、その夜半に上人の遺体を納めた棺を掘り起こして嵯峨の清涼寺（せいりょうじ）に運び、翌日さらに西山の粟生（あお）に運んで荼毘（だび）にふされたのです。聖人が草庵を結んだ稲田の地は宇都宮蓮生の勢力範囲であり、京都の専修念仏に関するでき事はいち早く聖人の耳に伝えられたことと思われます。聖人は、たび重なる専修念仏に対する弾圧と『選択集』に対する批判に深く心を痛められたことと思われます。それとともに『選択集』に示された専修念仏の仏道を体系的に明らかにすべく『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』の完成にむけて推敲を重ね、執筆に励む毎日であったと思われます。

寛喜（かんぎ）の内省

寛喜年間、聖人五十八、九歳の頃には関東や東海のみならず、京都でも飢饉（ききん）が相次ぎました。寛喜二年は六月というのに関東各地に雪が降り、秋作物は全く実らず飢饉になりました。寛喜三年も冷夏で農作物は皆目とれず、飢饉はますますひどくなり餓死者が続出しました。

ところで聖人四十二歳の時、佐貫（さぬき）というところで農民が飢餓や疫病で苦しんでいる姿を見て『浄土三部経』を千部読誦（どくじゅ）しようという誘惑に陥りましたが、

平安末～鎌倉初期（親鸞聖人の頃）に描かれた
『餓鬼草紙（がきぞうし）』（東京国立博物館蔵　国宝）

それから十八年も経った寛喜三年にもまた同じような体験を味わったことを、妻恵信尼（えしんに）公が娘覚信尼（かくしんに）に宛てた手紙に伝えています。

聖人は風邪をひいて、夕方から床につき、高い熱が出て、体に触れると火のように熱かったけれども、恵信尼には腰や膝をさすらすこともさせず、黙って寝ておられました。寝こんで四日目の明け方、苦しい中でたことがある。しかし自ら信じ人をして信ぜしめることは極めて難しいがそれを実行することが仏恩に報いることであり、南無阿弥陀仏の名号の信心の他に何が不足でお経を読もうとしているのかと思い直して、『三部経』の千部読誦をやめてしまったことがある。今また高熱にうなされたとはいえ、『無量寿経』を読んでいたのは、その時のことが心の端にまだひっかかっていたからであろう。人間の執心、自力の心というものはなかなか離れ難いものだなあということを思いしらされたのだ」と言われ、間もなく汗が出て、熱がひき、聖人の風邪はすっかりよくなったということです。

聖人が高熱の中で「まはさてあらん」（ああそういうことであったのか）と言われたのは、人間の自力執心の離れ難いことに気づかれたのです。私たちはどんなに不憫（ふびん）に思っても自力の力で人をたすけるということはできません。南無阿弥陀仏の名号を信じて如来さまに一切をおまかせし、生かされていく以外ないのです。

私たちは聖人の二度にわたる『三部経読誦』の誘惑の体験を知らされると、聖人は信心が定まっていなかったのではないか、また聖人といえども信心が揺らぐことがあるのかと、不信の念をいだくかも知れませんが、信心というものは一定のものではなく、現実のいろんな出来事や苦悩に直面して、時には揺らぎ疑念をもつことがあっても、常に如来の本願にすべてをおまかせするまことの信心にたちかえり、そこにいよいよ仏恩の深いことを思い知らされるものなのです。

恵信尼さまの手紙（抜粋）

三ぶきやうげにくしく干ぶよまんと候し事はしんれんぼうの四のとしむさしのくにやらんかんづけのくにやらんさぬきと申ところにてよみはじめて四五日ばかりありて思かへしてよませ給はでひたちへはおはしまして候しなり

しんれんぼうは日つじのとし三月三日のひにむまれて候しかばことしは五十三やらんとぞ　おぼえ候

こうちゃう三ねん二月十日　恵信

「まはさてあらん」（ああそういうことであったのか）とうなられました。恵信尼が「どうなさいましたか、うわごとでも言われたのですか」と問うと、聖人は「いや、うわごとではない。床に臥して二日目から『無量寿経』を読誦し続けていた。目を閉じてもお経の文字が一字残らずはっきり見える。これは一体どうしたことだろうと考えてみると、はたと思い当たることがある。十七、八年前、飢餓や疫病で苦しんでいる人のために『浄土三部経』を千部読誦しようとし

一切経の校合（きょうごう）

仏光寺の御伝鈔によると、親鸞聖人が鎌倉幕府三代執権の北条泰時に招かれて一切経の校合と書写を行なったという一段があります。泰時は祖母北条政子の十三回忌に当り、一切経供養を発願しました。鎌倉の大慈寺で追善供養を行うに先立って、一切経を校合する智者学匠（がくしょう）の僧たちが招請（しょうせい）されました。聖人もその一人に選ばれたのです。僧たちにはその労をねぎらうため、毎夕酒膳が供せられました。ある夕、お膳に生魚の切り身が供えられました。その時、他の僧たちは袈裟（けさ）を解いて魚を食べました。僧侶の肉食はタブーとされていたので、袈裟をとり僧ではないという形を整えた上で魚を食したのです。ところが聖人だけが袈裟をかけたままで魚を食べ始めました。その姿を見て不思議に感じたのが、後に五代執権となる九歳の北条時頼でした。時頼は無邪気にもそのわけを聖人に問いました。すると聖人は

「生きとし生けるものの命を奪い、肉味を食ることなどもってのほかのことです。阿弥陀如来も戒めておられます。しかし、末法濁世（まっぽうじょくせ）の今、戒を守る者などおりませぬ。私もその一人ですが、同じ生あるものを食するからには、生類（しょうるい）が解脱（げだつ）できるよう食すべきです。そのために三世の諸仏が解脱されたありがたい袈裟をかけて、その功徳をもって生類の往生の願いを果してやりたいと考えるからです」と答えました。

これを聞いた時頼、幼いながらも感じるところがあり、聖人の心ばえを賞めたたえたといわれています。（住職）

寄稿

坪谷町
近藤秀雄

私の母は、四十四歳の若さで此の世を去りました。生前、父と共に病床を訪ねた帰り際、ヒデを頼むと父に言い残した言葉、今も耳の底に焼き付いています。母亡き後は、いつも父について歩きました。野山へ行くのも寺参りも、学校以外一緒について歩きました。

戦時中、パラオ諸島にて爆撃に依り多数の兵士が爆風と破片により死傷。まるで生き地獄を見た様な思いにかられました。彼方此方で助けてくれと悲痛な叫び声が聞こえ、あまりにも悲惨な有様でした。私はお蔭様で軽い負傷で助かりました。

終戦後は、昼も夜も機銃に悩まされ、何時帰ることが出来るか解らないと言うので食事半減され、食器に米粒がパラパラと浮いている様な有様。このまま二ヶ月も続く様なことになれば、私の生命も終わりかと思う様になりました。数日後、入院時お世話になった松下軍医より連絡を頂き、隊員より一足先に復員させて頂きました。いつも誰か付いて助けて頂いている様な思いが致しました。

母屋の姉さんより、久保先生が見えられて良いお話があります、参って聞いておくれ、と言葉を頂き、聞かせて頂くうちに、私の腹底の、自分さえ良ければ人様はどうでも良い、一つ間違えば親でも平気で殺す様な鬼が棲みついている身勝手な浅ましい心が、鏡に映し出されて居る様な思いにかられました。先生の法話の中、信心を頂きたいと思えば、寝食を忘れ命がけで善知識に一ヶ月ほど聞けば少しは何とかなるかなと言われました。又、家内の父が私の家に来られ帰られる度に、兄さん今は多忙でしょうが、ご生の一大事心にかけて置いておくれと言って帰られました。

いろいろお聞かせ頂きました。人間はご生聞く為に生まれさせて頂いた。畜生は知恵が無いので聞くことは出来ないが、人間は知恵を持ち合わせているので聞くことが出来ると、お言葉を頂きました。

となえて聞けよ　南無阿弥陀
早く来いよの　親の呼び声

死を強く感じることが出来ない、人間の命も紙の裏表、一寸先は闇、生命あるのが当たり前と思っている生かされていることを忘れている私です。

最近私のためある先生から頂きましたお言葉

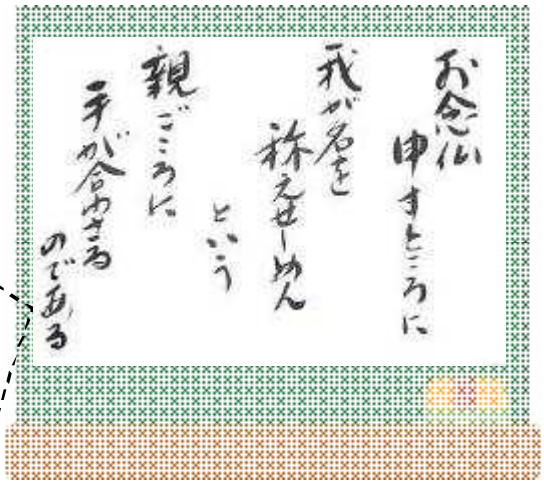
南無阿弥陀仏
弥陀はよぶ　見ている　聞いている　わかっている
はなれずにまもって　今ここに居るぞ
みなをよぶ人は　アミダに抱かれて
いやでも往くぞ　みだの浄土へ

自然の恵みとすべての命を頂いて生かされている我が身であることに気付かせて頂きました。

今は親様に守られ、家族に支えられています。命の有る限り、念仏を申させて頂きます。

今年九十才の年を越えさせて頂きました。目も耳も悪くなり解りにくい所もあると思いますがお許し下さい。

山門掲示板



お念仏申して、手を合わさしていただく、これ浄土真宗の宗教生活である。これは何もむつかしい行でなく、これほどやさしいことはない。しかしそれができないのである。

ご本願は「南無阿弥陀仏」として成就した。「南無阿弥陀仏」とは親の名告（なの）りである。親の名告りは、我が名を迷いの衆生に聞かしめ、称えしめんという親ごころとしてはたらく。私たちはお念仏申すところに久遠のいにしえより私に回向されてきた大悲の親ごころの一端にふれるのである。ある先生のおことばに

念仏は自我崩壊の音であり、
新しい自己誕生のうぶ声である

とある。新しい自己とは自我に生きるしかない私に頭が下がり、如来の親ごころのなかに蘇った新しい私である。（住職）

先輩の感動をたずねて

この句の意味を僕はこのように受け取ります。「五濁悪時群生海のあなた！というお釈迦さまの声に深くうなずきます。そして、アミダに導かれなさい！というお釈迦さまの声にも深くうなずきます。」

この句に関して、強く思い出される先生の言葉があります。それは「まじめになればなるほど濁るということもある」という言葉です。付け加えると「まじめなほど傷つけ合うんじゃないのか、この世に地獄を作るのもまじめじゃないのか」という意味です。

それはまさに僕のことだと思いました。それは大ショックでした。まじめというのは、濁りを何とかしようとすることです。それは人生の目的でもあります。

ところがそこには、自分には導く力があるという暗黙の前提があったのです。それを鏡に映してみると、世を濁している張本人だったのです。

ここに大きなひっくり返りがあり、驚きと感動があり、冒頭の呼びかけへの確信がありました。（編者）

ご じょくあく じ ぐんじょうかい
五濁 悪時群 生 海
おうしんにょらいにょじつごん
応信如来如実言
親鸞作『正信念仏偈』より

読み方―五濁悪時の群生海、如来如実の言（みこと）を信ずべし。
※五濁―劫濁（時代の濁り）
見濁（まなこの濁り）
煩悩濁（こころの濁り）
衆生濁（関係の濁り）
命濁（寿命の濁り）
※群生海―生きとし生けるもの全て。つながり合いを海に喩えて。

西雲寺の年末年始

よう降りましたね～

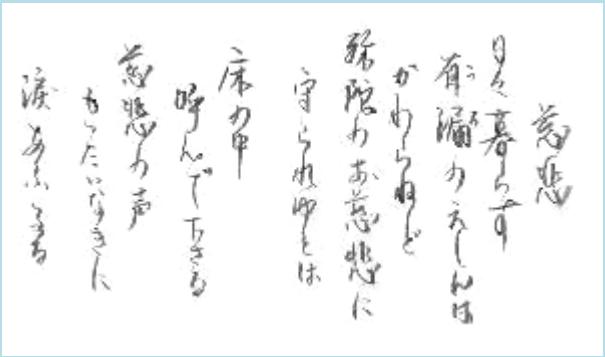
屋根雪を下ろしていただきました

残念なことに大枝が折れました

除夜の鐘　どなたでもついていただけます

お年頭のご挨拶

寄　稿



慈悲

暮らす
有難かったれば
かかわらねど
弱肉わが慈悲に
守られゆとは

床の中
呼んでいきる
慈悲の声
もったいなきに
涙ながらに

西別所町　釈真光妙映
※高田派の法名です

お年頭のお参り・六首引

発　行

真宗仏光寺派　専念山　西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　鈴木春夫
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

宗祖 750 回大遠忌参拝旅行

現在のところ
１泊参拝約 15 名（バス１台）、
日帰り参拝約 60 名（バス２台）
申し込みをいただいています
バスは大型を予約していますので
座席に余裕がございます
ぜひご一緒に参拝いたしましょう
詳しくは秋号(18 号)
もしくは西雲寺 97-2138 までどうぞ